

令和5年7月 県央史談会史跡めぐり

連合艦隊司令部日吉台地下壕の見学

2023年7月29日(土) 13:30～

日吉台地下壕（ひよしだいちかごう）は、第二次世界大戦（太平洋戦争）中に大日本帝国海軍が神奈川県横浜市港北区日吉の慶應義塾大学日吉キャンパス地下などの一帯に建設した防空壕。日吉台遺跡群の1つ。連合艦隊司令部や、海軍省人事局・航空本部・艦政本部などの海軍の重要機関が入居する地下要塞として使用された。

現在、慶應義塾大学日吉キャンパスや東横線日吉駅などが所在する地域は、下末吉台地東端部にあたる日吉台と呼ばれる標高 35～40 メートルの台地地帯である。日吉台地下壕は、戦争の末期に空襲を避けつつ指揮を出来るよう、日吉台の斜面をトンネル状に掘削して造られたコンクリート製の地下要塞である。

海軍機関の日吉への移転は 1944 年（昭和 19 年）に始まるが、当初は慶應義塾大学の校舎および寄宿舍や生徒が疎開した国民学校などを間借りしていた。慶應寄宿舍の地下に連合艦隊司令部用の壕が掘られたのを皮切りに、他の機関を収容するための壕が増築されていった。

同大日吉キャンパス地下に連合艦隊司令部地下壕・海軍航空本部等地下壕・海軍省人事局地下壕・軍令部第三部待避壕が建造された。また日吉キャンパスより西方の台地地下に艦政本部地下壕が建造された。この 5 つの大規模地下壕以外にも、矢上キャンパス地下の運輸省航空試験所地下壕等を含め、多数の小規模地下壕群の存在が確認されており、調査を行っている慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室は「日吉キャンパス一帯の戦争遺跡群」と呼び、広義の「日吉台遺跡群」の 1 つに位置付けている。

敗戦後に地下壕はそのまま残され、慶應義塾大学敷地内の一部については、『日吉台地下壕保存の会』が大学の許可を受けて定例的に見学会を実施している。一方、民有地にかかる部分については、2013 年（平成 25 年）に宅地造成に伴い東側の入口が破壊されるなど、失われた箇所がある。

現在は「横浜市行政地図情報提供システム」で地下施設の位置がラインで示されて考古学的な遺跡の扱いになっているので、破壊行為は文化財保護法や横浜市文化財保護条例に違反する行為である。

2015 年には、日吉台地下壕をテーマにした展覧会「特別展 陸にあがった海軍—連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争—」が開催された（主催・会場：神奈川県立歴史博物館、特別協力：慶應義塾）。

（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より）

地下壕等の見学にあたって（お願い）

慶應義塾

日吉キャンパス事務センター

慶應義塾大学日吉キャンパスには、地下壕（旧連合艦隊司令部跡）をはじめ、いくつかの戦争遺跡があります。見学会に参加される皆様におかれましては、必ず案内人の指示に従い、単独行動はお控えいただくと共に以下の注意事項を厳守いただきますようお願いいたします。注意事項をお守りいただけない方につきましては、直ちに見学をお断りする場合があります。

1. 地下壕への入坑

地下壕は、事前に見学申込みをされた方以外にご見学いただけません（保険加入が必要なため）。また、小学校3年以下の児童および乳幼児の入坑はお断りしています。

2. 安全対策

見学コースの途中には、階段や滑りやすいところがあります。特に地下壕内は非常に暗く、急な坂道や水溜まり、床を横切る排水溝等が敷設されているところもありますので足をとられないようご注意ください。走ったり、跳ねたりされると大変危険ですのでお止めください。

3. プライバシー保護等

第一校舎は高等学校、第二校舎は大学の校舎として現在も使われています。また、その他の見学コースの近くには民家があります。授業に差しさわりのないよう、また、近隣の住民の皆様のご迷惑とならないよう静かにご見学ください。

寄宿舎は3棟のうち1棟は現在も大学の寄宿舎として多くの学生が生活しています。プライバシー保護のため、近くへの立ち入りや写真撮影はご遠慮ください。

4. 写真（静止画、動画）の撮影

寄宿舎を除き、撮影禁止箇所はありませんので、ご自由に撮影いただけますが、撮影に熱中して転倒・落下・墜落など危険な状況にならないよう、周囲の状況を十分に確認しながら撮影してください。撮影に際しても単独行動は禁止いたします。

なお、案内人を含め個人の顔が写る場合には、必ず事前に本人の了解を得てください。また、撮影した映像は許可なくインターネットや配布物により公開することはできません。

5. 施設保護

地下壕内では落ちている木片・釘等の遺物に触れたり、持ち帰らないでください。また、鉄打ちの靴や金具の付いた靴は、床を傷めますので、ご遠慮ください。歩きやすい靴（運動靴、スニーカー等）を履かれることをおすすめいたします。写真撮影等においては三脚の使用はできません。

6. その他

- ・ キャンパス内はタバコ等を含み火気厳禁です。所定の喫煙所以外での喫煙はご遠慮ください。
- ・ キャンパス内および周辺におけるご見学の皆様の事故・ケガ並びに衣服や携行品等の損壊・汚損については、義塾の一方的過失以外については、一切の責任を負いかねます。
- ・ 見学コース内には階段や段差があるところがあります。車椅子、松葉杖等をご使用の場合は、ご見学いただけない場所もございますので、あらかじめご了承ください。
- ・ 事故・災害等やむを得ない都合により、ご見学いただけない場合があります。施設見学中であっても、緊急事態にあると案内人が判断した場合には、見学中止としますので、直ちに指示にしたがって避難行動をとってください。
- ・ ご見学の様子を義塾の公式ウェブサイトの更新情報としてご紹介させていただくことがございます。

以上

※慶應義塾は、日吉キャンパスの戦争遺跡の歴史を正しく伝えると共に、安全にご見学いただくため「日吉台地下壕保存の会」に案内人をお願いしています。

日吉台地下壕

—連合艦隊司令部ほか、旧海軍極秘地下施設—

寺田 貞治

『武蔵野』75(2)(330)、武蔵野文化協会、1997-08。

国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/7932720> (参照 2023-07-26)

一 日吉台地下壕の分布と概要

地下壕のある場所については、東急東横線日吉駅東側の慶應キャンパス内に三か所、西側の慶應普通部の南側（箕輪）に一か所ある。他に日吉駅の西北西約2kmほど奥まった、川崎市蟹ヶ谷の旧海軍通信隊のいた所にもある。日吉台地下壕の規模は、慶應のキャンパス内だけで長さ約2.6kmに達する。西側の慶應普通部の南側は一か所で2km以上もある。蟹ヶ谷は規模は小さく、数百mにすぎない。日吉台地下壕は単なる防空壕ではなく、当時は海軍の重要な施設が集中しており地下施設と呼んでいた。慶應のキャンパス内にある地下施設の中で最大のものは、南側の丘の下にある地下壕（図1の①）で、非常に複雑で、一見迷路のようになっている。この地下壕の西側の部分（図1の①-A）は、最も堅牢で完備しており、連合艦隊司令部と、後に新設された海軍総隊司令部が入っていた。東側の部分（図1の①-B）には、大本営海軍部の軍令部第三部（情報部）と、海軍省の航空本部が入った。現在、新幹線がこの地下壕の上を走っている。

Aの司令部地下壕内の作戦室・電信室・暗号室など重要なところには、当時珍しかった蛍光灯が使われ、昼のように明るかったといわれるが、現在は真暗である。慶應高校校舎（第一校舎）付近の地下壕（図1の②）は、最も小さく、当時、校舎内で仕事をしていた情報部の人たちの防空壕として掘られたものである。高校校舎の南側玄関の前には地下壕への出入口があったが、既に壊されていない。慶應義塾の一番北側にある地下壕（図1の③）は、その中心に広い地下室があり、そこから六本の地下壕が放射状に延びた構造をしている。この地下壕には海軍省の人事局が入っていた。①②③の地下壕は、いずれも周りが三〇〜四〇cmの厚さのコンクリートで出来ている。

日吉駅の西側の地下壕（図1の④）は、東西方向に真直ぐに一〇本の地下壕と、これらを結ぶまるでアミダくじのように掘られた南北方向の地下壕で出来ている。ここには海軍省の艦政本部が入る予定になっていた。北寄りの四割はコンクリートや大谷石で造られているが、その他は素掘りである。

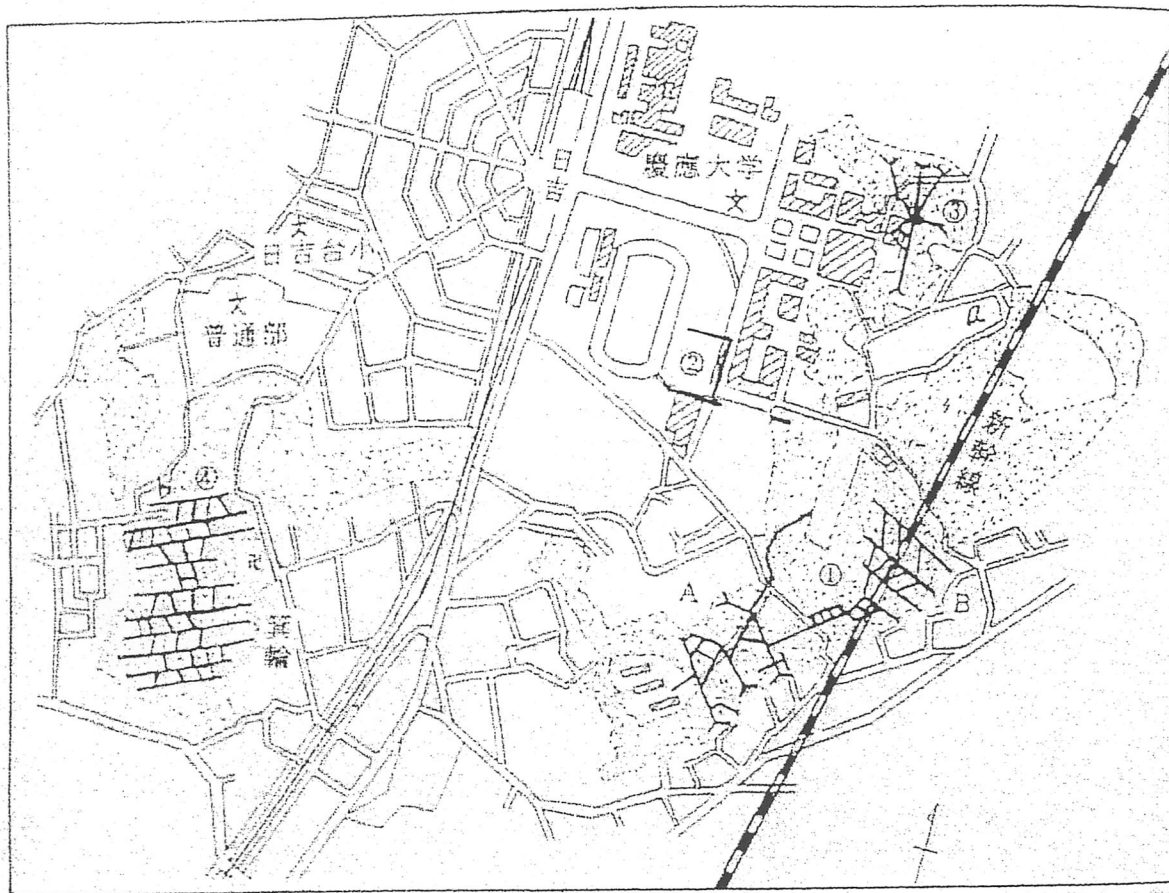


図1 地下壕分布図

連合艦隊司令部が巡洋艦大淀から丘に上がったのは、大淀では十分な司令部の機能を果たすことができなかったことと、大淀ならびに護衛の駆逐艦三隻も戦力に使用しないのは無駄であるとの考えからで、司令部は昭和一九年九月末に日吉に移ってきた。日吉が選ばれた理由としては、日吉が無線通信の受信状態がよいこと、地上に堅牢な建物があり、地下壕が掘りやすいこと、東京に近く軍令部に連絡がとりやすいことなどが挙げられる。人事局は、霞ヶ関の海軍省の中にあつたが、空襲で海軍省も危ないということで、昭和二〇年五月二五日の東京大空襲の前に人事局の大部分が日吉に移ってきた。同じころ、海軍省にあつた経理局もその一部が日吉に来た。

航空本部は海軍省の建物内にあつたが、昭和二〇年五月二五日の空襲で、航空本部も一部



連合艦隊司令部地下壕の堅穴の出入口

焼かれたので日吉に來た。

艦政本部は田村町の日産ビルにいたが、日吉に來ることにしたのは、空襲による爆撃が激しくなってきたからである。しかし引越しの予定日が敗戦の日と重なったため、結局は艦政本部は日吉に來なかつた。

その他、東京警備隊、東京通信隊、海軍水路部、功績調査部なども來ていた。敗戦も間近い八月の初め、横須賀基地に四〇〇人いた朝鮮人部隊の半数が日吉にやってきた。これは敗戦の日日本兵とのトラブルを避けるためだったといわれる。

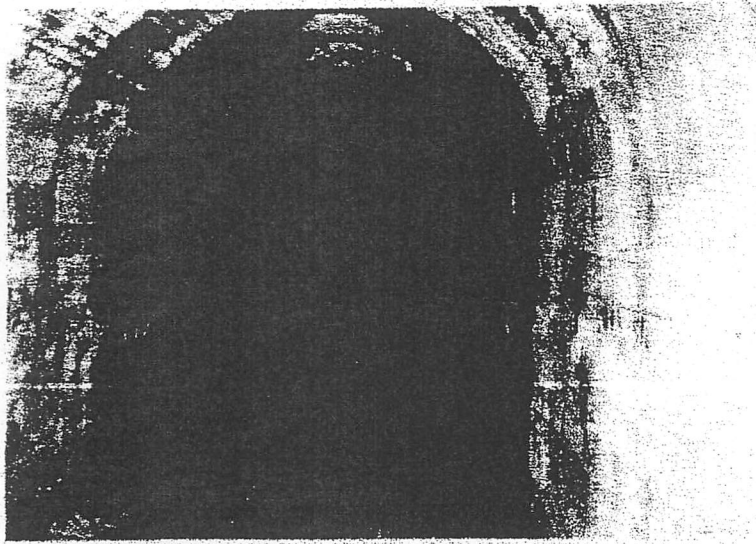
二 地下壕建設はどのように行なわれたか

連合艦隊司令部の地下壕設営は、当時の海軍省としては珍しく大規模で、機密度の高い、超特急工期の工事であった。その前に昭和十九年（一九四四）七月十五日、第三〇〇設営隊が、軍令部第三部の待避壕設営のために、キャンパスの第一校舎近くに地下壕を掘り始めていた。次いで八月十五日、内地としては大型設営隊（兵力一五〇〇名）第三〇二〇設営隊が設置され、日吉地区に駐屯して、連合艦隊司令部の緊急地下施設の建設が始まった。作戦室、通信室、暗号室など初期緊急地下施設が完成して、予定よりもやや早く九月二十九日に司令部が移ってきた。豊田司令長官は新司令部を第一作戦司令部と

呼称した（第二作戦司令部は台湾の高雄とした）。

一〇月に入ると、第三〇〇設営隊は次の任務地「館山航空基地飛行機隧道」設営のため移動していった。これと相前後して、人事局の地下設営のために、東京地方施設事務所編成の柳瀬隊が、民間建設業者鉄道工業（株）を協力作業隊にして、駐屯してきた。鉄道工業は、当時、国鉄その他鉄道工事専門企業で、特に隧道を掘るのが専門であった。第三〇二〇設営隊は、大工・左官・農民など赤紙一枚で徴用した四〇歳前後の兵から構成されていた。鉄道工業から派遣されてきた民間の労働者は、約二〇〇人で、このうち少なくとも七〇〇人は朝鮮人であった。これらの人々すべてを併せて、一時は約三二〇〇名の人々が地下壕の設営の作業に従事していた。地下壕の掘削は昼夜三交代制で進めていた。鉄道工業がつれてきた朝鮮人労働者には難工事をやらせ、待遇も悪かったようである。キャンパス近くの農家の人の話によると、手真似で「何か食べさせてほしい」としばしばやって來たので、御飯を食べさせてあげたという。その時、日本語が話せず手真似だったので、朝鮮から直接連れてこられた人達だと思ったという。

慶應の日吉キャンパス内で働いていた朝鮮人の飯場は、保福寺近くの慶應のテニスコート付近にあったそうである。日吉駅西側にある艦政本部の地下壕を掘っていた朝鮮人の飯場は、日吉台小学校から通称赤門坂を下がった所にあった。こ



日吉駅西側の地下壕内部（トロッコの机木の跡が残る）

の飯場には、二本組が連れてきた朝鮮人が約一五〇人いた。現場監督の息子の話によると、朝鮮人の親方がいて、労働者の面倒を見ていたという。これは、朝鮮人の不満が直接日本人にぶつかることのないようにとの配慮のようである。

B二九の本土襲来が開始されて間もなく、日吉台地区では土かぶり三〇mを目標に、地下施設設営可能な所は何処が入るか未確定のまま全面的に地下壕の建設を続けた。地下壕は高さ三〇数mの丘の麓から掘り始められた。当時、農家は丘

の麓に家を建てて住んでいたが、無理矢理に家を麓から引き離された。地下壕は主にツルハシで掘り時々ハッパをかけ、掘り出した土砂はモッコやトロッコで外に運び、田圃や畑に捨てた。関係する土地は、海軍が「お国のため」といって、有無をいわず地主から買い上げた。昭

和二〇年六月以降になると、セメントが足りなくなり、当時戦災にあった田園調布邸宅街の石垣・塀などに使用してあった大谷石を転用して、艦政本部の地下壕設営工事をした。地下壕掘削工事による犠牲者は、発表されているものでは、計六人とされている。この中に朝鮮人労働者が含まれているのかどうかは不明であるが、付近の民家の人の話では、夕方暗くなると地下壕の中から棺桶のような箱がトロッコに乗せられ出てくるのを、しばしば見かけたことがあったという。保福寺の住職の話によると、戦後間もない時、海軍の人からあずかった身元不明の一体の骨壺が今も寺にあるそうである。また裏山に戦時中亡くなった身元不明者を埋めたと聞いているが、埋めた位置や人数は分からないとのことである。

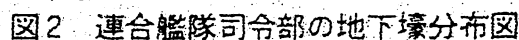
三 日吉で海軍は何をしていたか

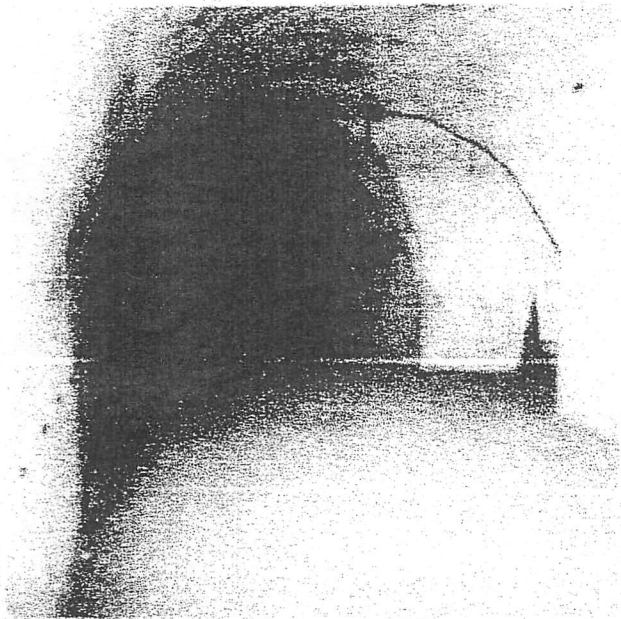
○連合艦隊司令部・総隊司令部

司令部の将校達は、空襲のない時は慶應が学生用に建てた丘の上の寄宿舎で仕事をしていた。下士官・兵は南側出入口付近の半地下のカマボコ兵舎で交代で寝泊まりしていた。空襲の時は、司令長官は地下の長官室で、幕僚は地下作戦室の壁際のベットで休んでいた。空襲が激しくなってくると、下士官・兵は通路の片側に二段ベットを並べて休んだ。作戦会議は、空襲の時を除いて寄宿舎内の作戦室で行っていた。

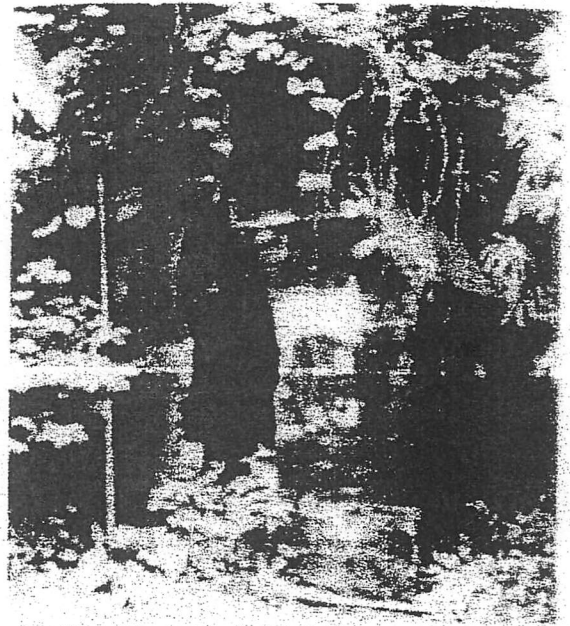
三時間交

八月一五日、司令部は日吉で敗戦を迎え司令部の者全員が





連合艦隊司令部地下作戦室



連合艦隊司令部の地下壕入口の一つ

寄宿舎の前に集められ、玉音放送を聞いた。司令部は、一切の戦闘行為停止の大命を各部隊に伝え、一週間以内に多摩川の北に移れという命令で不要書類を焼き、八月二三日に目黒の海軍大学校校舎に移った。

○軍令部第三部（情報部）

昭和一九年七

月（日吉に移転

した直後）まで

に、学徒出陣に

よって海軍に入

隊してきた大学

出身の予備士官三〇名の配属によって、対米情報強化され組織もだんだん整備されてきた。予備士官達は、全世界にまたがる米軍の作戦地域における艦艇や飛行機の動き、米軍兵力配備の推定、その他数多くの有益な情報を得たところである。

昭和二〇年七月頃、地上の校舎から日吉台の地下壕に、情報部の主要な部分は移り作業をすることになった。中央の情報部なども決戦体勢に入った。日吉での食事は悪く多くの人が痩せてしまった。

昭和二〇年六月には対米情報課の全員は一三〇名の太所帯になっていた。七月下旬、情報部の予備士官四八名が、本土決戦のための配備についた。

○人事局

日吉では、八時になると地下壕に行き、地下壕の中で仕事をしていた。寝泊まりは、校舎（高校の北側校舎）の二階で、鉄製の二段ベッドがあった。食事は当時としてはよかった。人事局は二〇〇人ぐらいいた。軍人は校舎に宿泊していたが、女子学習院高等科の女子も一〇人ほどいた。また、旧華族の娘もいた。民間では女子挺身隊として工場などに行かされたが、学習院などのお嬢さん達は海軍省など軍の役所に来ていた。人事局では、士官（予備士官も含む）の人事を中心に扱った。人事局の仕事は、部隊編成をするとき、兵員の割り振りをする

仕事であった。

○経理局

日吉には経理局第三課とともに総勢二五〇―二六〇名ほどいた。ここでは経理局は、艦隊経費・物品会計の仕事をしてた。経理局第二課も来て、四〇名ぐらいで共済・年金関係の仕事をしてた。経理局には武官と文官のほか、女子が五〇―一六〇人ほどいて仕事をしてた。空襲の時は校内放送で校舎の近くの防空壕に入った。この防空壕は、高さ二m、幅二mぐらいで、コンクリートや素掘りの所があった。

○航空本部

昭和二〇年五月二五日、空襲で海軍省が焼かれた。海軍省に入っていた航空本部は、その一部が日吉に来た。日吉に来たのは、航空本部の第一部（補給部）で五〇人ぐらいいた。第一部は飛行機の部品・調達・配分の仕事をしてた。飛行機の発動機とプロペラなど軍令部の作戦計画に沿って工場に部品を発注し、出来上がると、それを各航空隊に分ける仕事であった。当時、エンジンは回ればよしとした。航空本部で使っていた機械や道具はアメリカ製であった。戦争も末期になると、首なし（発動機なし）の飛行機ばかり出来た。最後にはベニヤ板で出来た飛行機もあったという。

○艦政本部

艦政本部は艦船を作り、供給するところで、主な仕事は艦

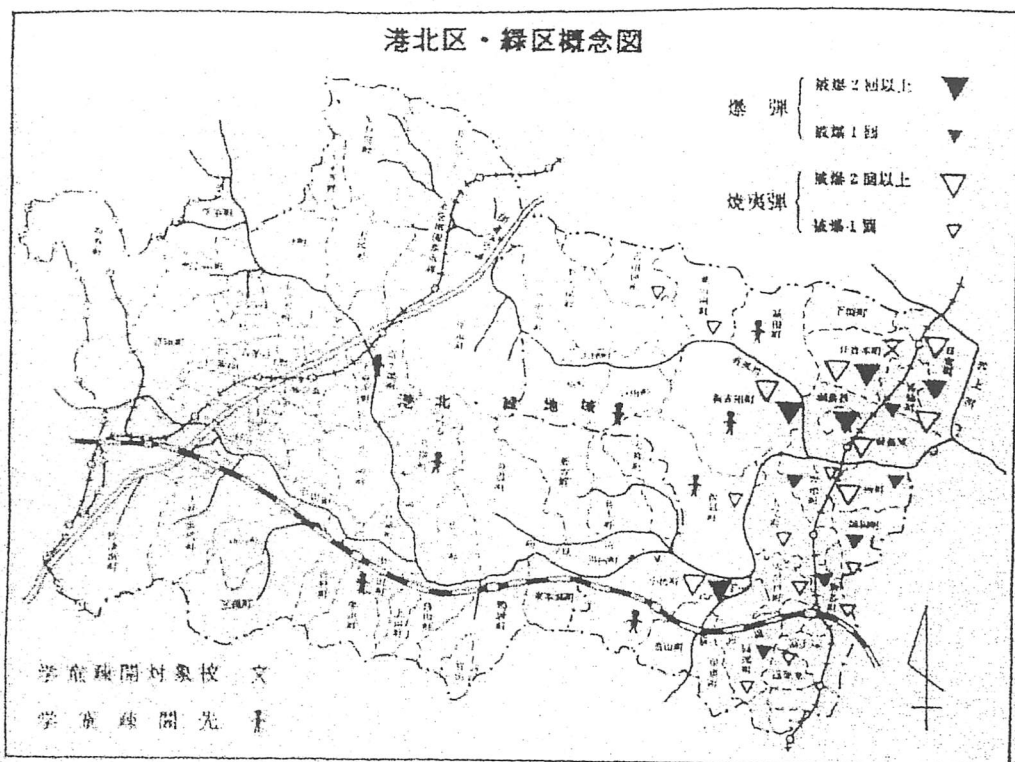
船に関すること、経理に関することであった。戦争も末期になると艦船など作る余裕はなく、もっぱら沈没した艦船の後始末に追われていた。日吉に艦政本部が引っ越すことが決まって以来、担当者が二―三度日吉に様子を見に来た。玉音放送は、日産ビルの艦政本部で聞き、敗戦により引っ越して中止した。

四 日吉台地下壕と空襲

日吉地区は、大空襲が昭和二〇年四月四日、四月一五日、五月二四日の三回あった。四月四日の空襲では、宮前町・日吉本町・箕輪町・新吉田町が、油脂焼夷弾と爆弾によってやられ、特に地下壕付近の民家が多く焼失した。宮前町のある民家では、寄宿舎の連合艦隊司令部めがけて落とした二五〇キロ爆弾が落ちて落ち、四人が死亡し一人が大怪我をした。司令部でも機関科の兵が、焼夷弾の直撃を受けて死んだ。

四月一五日の空襲も焼夷弾と爆弾で、日吉の町がやられた。

日吉台小学校、日吉郵便局、駅前商店街、金蔵寺の観音堂、慶應の工学部校舎などが殆ど焼失した。日吉台小学校は、昭和一九年九月に児童の集団疎開が行なわれ、下田の真福寺や高田の興禪寺などで授業が行なわれた。日吉台小学校には、昭和一九年一〇月に海軍の功績調査部が入った。五月二四日の空襲は、焼夷弾によるもので、箕輪や日吉本町などがやられ、



大聖院を初め、特に地下壕付近の民家が多く焼失した。三回の大空襲で、地下壕の近くの民家は八〇%以上焼失し、亡くなられた方もいた。

「日吉に海軍がこなければ、これほどまでに日吉がやられることも無かっただろう」とは、多くの人々の声であった。

空襲の時、急降下で機銃掃射する敵機めがけて第一校舎の屋上から、機関砲で応戦していた。矢上（現在の慶應工学部）には探照灯陣地があり、高田には昭和一九年にできた高射砲陣地があった。高射砲陣地には、四〇二部隊の一八〇人（高田隊）が来ていた。ここには高射砲が六門あり、六五cm砲、一〇cm砲などが備えられ、B二九爆撃機に向けて盛んに撃っていた。

五 米軍進駐と戦後の日吉

日本の敗戦とともに、昭和二〇年九月に慶應の日吉キャンパスに米軍が進駐してきた。第一校舎に米軍騎兵第一師団と米第八軍第二兵团（通信部隊）が、第二校舎に職業訓練所、寄宿舎に米軍将校宿舎、工学部残存校舎その他に米軍料理学校が駐屯した。

米軍は、慶應の他に、近くの日吉本町の岡本工作機械や川崎市中原区木月の航空試験所などにも駐屯し、日吉の町はさながら米軍基地の町と化した。日吉駅周辺は、夕方ともなれば米兵相手の女性が何十人とたむろしていた。当時は治安が悪く、さまざまな問題が起った。一九四九年一〇月一日に、日吉キャンパスは慶應に返還され、学生達もキャンパスに戻り、日吉の町もようやく本来の活気を取り戻してきた。

（慶應義塾高等学校）